

## 報告

# 「いのちはみんなつながっている」知識より知恵を」

本橋成一氏（映画「ナージャの村」監督）講演

～第二回 お茶の水女子大学ECCCEL子ども学シンポジウム

「今、子どもが育つ環境を考える」(二〇一一年十一月十九日)から

菊地知子

お茶の水女子大学ECCCEL<sup>注1</sup>では、二〇一一年十一月十九日に第二回子ども学シンポジウムを開催しました。前半は写真家であり映画監督である本橋成一氏の講演、後半は、教育社会学の立場から小玉亮子氏、小児科学の立場から榎原洋一氏によるコメントと本橋氏による応答がありました。ここでは、本橋氏によるお話の一部をご紹介します。以下、第二回子ども学シンポジウムお知らせの文言です。

今回の震災で私たちは、あたりまえに続くと思込んでいた「日常」が失われ分断され得ることを改めて知りました。その中で、幼い「いのち」をどのように生かしていけばよいのでしょうか。はるか先の時代まで持ち越し、

未来の子どもたちに背負わせることになってしまった目に見えないものに対し、私たちは自覚的に、今ここへのまなざしだけではなく世代性を含めて考えていかなければならないと思います。チエルノブイリの事故をどこか遠い国の、関係ない話だと勘違いできなくなつた今、三月十一日以降の、子どもという存在や子どもを取り巻く社会の今後について、本橋監督のお話から皆で一緒に考えていきましょう。

菊地（司会） 本橋さんは、チエルノブイリ原発事故で放射能に汚染され、政府の立ち退き要請で地図から消えた村で暮らし続ける住民を描いたドキュメンタリー映画「ナージャの村」や「アレクセ

イと泉<sup>注2</sup>」を撮られた監督さんです。どちらの映画にも人間だけでなく動植物いろいろな生き物たちも出てきますし、息を呑むような美しい風景もたくさん出てきます。今回の原発事故で私は改めて、モノやお金、利得や便利さ快適さを求めるあまり、子どもたちや若者、加えて、動物や草木、すべての生き物にすまないことをしてしまっただけ、という気持ちがあります。私たちは今日、「いのちはみんなつながっている」知識より知恵を」という副題で本橋さんのお話をお聞きします。どうぞよろしくお願いします。

**本橋** 今日まずお話をしようと思うのは、一九八六年に起こったチェルノブイリ事故のこと。私がチェルノブイリに最初に行ったのは事故があつた五年後です。僕は写真家ですが、報道カメラマンではないので、すぐ行ってすぐ撮るっていうのが得意ではない。早く行ってみたいという気持ちはあつたんですけど、なかなかすぐには行動に移せず、一九九一年の春に、信州大学の医学部のお医者さん、小児科とあとは甲状腺の第二外科、その先生たちに同行する

ことになった。最初に案内されたのは、あの石棺といわれる、事故の起こった4号炉なんです。バスで案内されて見学ができるようになっていたんですけど、案内の方は「安全ですから、安全ですから。ご安心ください」としきりに言う。その割には「ここには5分だけ」と制限する。そしてカメラバッグを置こうとしたらものすごい勢いで怒られたんですよ。安全だということにどうということなんだろうと。それで、お医者さんのお一人が、測定器を持ち込んでいて、スイッチを入れたらすごい音でピーピーピー鳴りだした。それまでは、のどかな初夏の日で、ああ本当に事故が終わったのかな、という気になったのですけれど、スイッチを入れた途端にピーピーピーの音のすごい鳴る。よくいわれますが、放射能っていうのは痛くもかゆくもない。ただ、あの音だけがすごく怖かったですね。

次に案内されたのはベラルーシという国。チェルノブイリというのはロシアとベラルーシとウクライナとの、ちょうど国境のそばなんです。それで、

ベラルーシのゴメリ州という所が、事故のあった原発から一八〇キロ離れているのに高汚染度になってしまった場所で、その州立病院の小児病棟に、放射能による障害が起きた子どもたちが集められていました。抗がん剤で本当に苦しい思いをしている子どもたちがベッドに横たわっていて、僕が先生に案内されて入っていくと、本当に一生懸命起き上がってニコツと笑って歓迎をしてくれるんですね。それがとってもつらくて、やっぱり自分たち（先行世代）のせいでこの子どもたちをこうしてしまった、つまりおじさんたちが豊かになるうなるうとしたそのつけが、全部その子どもたちにいつてしまった。本当にごめんなさい、という思いで、こういう子どもたちを僕には撮れない、だから僕はもうここに来るのはやめようと思っただけですね。

そして最後に案内されたのが、ゴメリ州の中でも僕の二つ目の映画の舞台になっている地域です。信州大学の先生たちが、その小さい病院に四日か五日滞在するのでついに行った。僕は写真を撮ろうと

いうよりも、何か手伝いたいと思って、白衣を借りて行ったんですけど、何もできることがなくて、そうだ、この村々だったら写真が撮れそうだなって思っただけです。というのは、四月で、真っ白いリンゴの花が満開だったんです。そしてちょうどジャガイモの植え付けの時期で、汚染されている村もそうじゃない村も、都会から子どもたちが戻ってきて、皆、農作業の手伝いをしていた。日本人に会うのは初めてということで、見かけると家の中に招き入れられて、あつという間にごちそうが出て、サマゴンという自家製ウオッカを出され、言葉もほとんどろくに通じないのに何だか盛り上がって、それを一日三軒くらい呼ばれて行く。信州大学の先生たちが、今日は何十人診たとか、あの子はすぐに治療しなきゃだめとか、皆が相当疲れている中で、ごちそうやお酒を振る舞われた話ではできなくて、結局もう二度とこの地域には来ないだろうと思っていたら、三か月後にはまた行っていたんです。娘の結婚式だから写真を撮りに来てくれとか、溶接棒がないから持ってき

てくれとか、心臓があまりよくないから薬を持ってきてくれとか、そういう注文をたくさんもらった。それがきっかけにはなつたけれど、僕がそこに通いたくなつたのはなぜかと一言で言う、「いのちが見えた」というようなことだつた。チェルノブイリの悲惨さはテレビや雑誌でさんざん紹介されていましたが、僕は、彼らの暮らしを見て、悲惨さというよりも彼らの「暮らし」を撮れたらいいなと思つたんですね。フランス人の僕の友達が僕の写真集を見て、これはフランスの百年前、いや二百年前の風景だな、と言つたくらい、時代遅れというか、本当に素朴な暮らしをしているんです。だけど一つひとつを見ると本当にちゃんと命と向き合つて暮らしている。後に知つたんですけれども、チェルノブイリの原発の6割から7割は輸出用だつたんだそうです。輸出用のドル稼ぎの発電所だつた。福島原発も東京で使う電力のためですね。本当に皮肉なことだと思つたんですよ。村のどの家に訪ねていっても本当に素朴で冷蔵庫など家電製品は本当にない。電気なんかほと

んど使っていない。車もない。でも彼らは決して自分たちの暮らしは貧しいとは思っていないんですね。そこがすごいんです。その後十数年通つたわけですから、その間にソ連が解体してロシアもベラルーシも経済発展し、あつという間にどんどん物が入つてきました。が、ともかく僕はそこで、こんなまともな暮らしがあつた、というのを見た。

映画の舞台となつた村には、数えてみたら四十回くらい通つたと思います。その暮らしがなぜそんなに僕を惹きつけたかという、僕は敗戦の時、五歳で、戦後の貧しい暮らしというか、物が無いシンブルな暮らしの中で育つた人間です。それで余計に、何か彼らの暮らしというのが見えたと思うんですね。その後、一九六四年の東京オリンピックをピークにどんどんどんどん物質、モノの文化に変わつていった。物質的に豊かな文化を得るために、何かもう一つの豊かさを失つていった。そういうことがずっと僕の写真のテーマになつていふと思うんです。

3・11の時に僕が一番思つたのは、自分たちの暮

らしをそろそろマイナス計算で考えないと、このままで持続するわけではない、ということですよ。たとえば東京―大阪間を新幹線で2時間を切ることばっかり考えていたけれど、もうそろそろ2時間じゃなくて3時間10分でもいいんじゃないの、というふうな計算をしていくことが一番肝心なことじゃないかと思っっているんです。

産業革命で動力というものができたことによつてたとえば低い所から高い所に水が流れるようになった。そうすると、食べ物採れず住めなかつた場所にも人間が住めるようになってしまった。でも本来そこには他の命を持っているものがたくさん住んでいたわけですよ。そういうものを追い出したり、殺したりしながら人間だけが増えていった。距離も動力によつて短くなつたから、あつちのものを持つてきて食えるようになったり、こつちのものを売るこつとができたりして、あつという間に人口が増えていった。だからこそ僕とか皆さんもいるわけですけど、もうそろそろ本来の姿に戻していかないといけない

と思ふんです。

「アレクセイと泉」の時に僕は水のことが気になつて、いろいろ読んだり聞いたりしたんですけど、アレクセイの村でじいばばたちに、どうして村から町に出ていかないのか聞いたら、一番の理由は命をお返しする時に、この村、この泉にお水を返せないから嫌だよつて言うんですよ。水を借りている、借りている水を返しに行けなくなるから嫌だ、と。それがすごいなつて思つた。人間7割は水なんだそうですね。体重が五〇キロの方だつたら三十五リットルも持つているわけですよ、皆。命がなくなつたら皆返すわけですよ。あるテレビ番組で言つていたんですけど、生き物たちが借りられる水は地球の中の水の0・003%から0・006%しかないんだそうですね。だから世界の人口が西暦二〇八五年に八十五億人以上になつた時に、その水が足らなくなつてくるつて言つてたんですよ。(現在)七十億人ですからね、あと十億増えることは簡単なこととして、いい増え方をしなきゃいけないんだらうなと思ひますが、た

たとえば太陽光パネルでも、山や野原や海の上に敷き詰めればその下にいる生き物たちの生きる場所をなくす。そして人間の都合でいづれゴミになるものを生み出して残していったら、若い人たちは大変だろうって思うんですね。僕らがつくったものを全部君たちにお願います、とたくさん残していくわけで、それに対しては本当に、(若いこれからの人たちが)本気で怒っていいんじゃないかって思います。

結婚式にも、出会えば必ず招待されて、たくさん出てきました。だけど事故当時の子どもたちが二十歳過ぎて結婚して出産の時期を迎えると、皆、いろんな心配事を抱えて産婦人科にやって来る。実際に放射能のために流産するというようなこともないことはないんだけど、半分は精神的な面ですよ、それで出産率が低下する、ということを取材しました。今回の東北でも、今小さい子どもでも十五年後二十年後子どもを産むようになっていく。その時までずっと今ここでのことを引きずっていくわけですからね。どうやって皆でケアしていくか。そういう問題

がこれからたくさん出てくるでしょうね。

このままモノを増やすとか時間を短縮するという豊かさを求めるのではなく、そろそろマイナス計算をやっていく。そして気持ちはプラスにしていって、ナージャって、ナジェージュという女の子の名前の通称なんです、ロシア語で希望という意味なんです。よね。たまたま、ナージャの映画だったんです。そういう希望、夢を皆でちゃんとつくり出していけるように、今日は若い方がたくさん来ているので、ぜひ、僕らおじさんおばさんにできることを一緒にやっていけたらいいなって思っています。

(お茶の水女子大学)

## 注

- 1 Early Childhood Care/Education & Lifelong Learning 「乳幼児教育を基軸とした生涯学習モデルの構築事業」の略称で、平成22年度より6か年計画で推進される特別経費による教育研究プロジェクトです。乳幼児、学生、社会人が共に学び自らの成長を探索する場の創造を目指しています。

- 2 本橋氏の作品については巻末「ひろば」欄参照。